明治時代編 輝ける追手門の歴史に学ぶ❶

追手門学院大学　大学事務部付教育主事　宮本 直和

侍従・高島鞆之助の帝王教育

創設者・高島鞆之助は、陸軍大臣・拓殖務大臣を歴任した、明治時代の軍人だが、普通の軍人ではなかった。

高島先生は、NHK大河ドラマ「篤姫」で登場した島津久光公の奥小姓を務め、戊辰戦争で酒田降伏時、黒田清隆とともに使節として赴き、歴史に残る降伏式を行っている。

こうした経緯から、西郷隆盛の推挙によって、明治天皇の侍従に就任したものであろう。

明治4年8月12日に御乗馬掛となり、明治5年4月30日には侍従番長に就任。また、明治6年には、樺太の実況視察に赴き、翌7年、佐賀の乱勃発につき、佐賀出張を命ぜられ、国家のために東奔西走している。

この侍従時代（明治4年～7年）、歴史のお話を好まれた、明治天皇に、「欧米各国の事情や、和漢古今の治乱興亡の話やら名君賢人の事を申し上げ…」（『明治大帝の思い出』）、帝王学・帝王教育を体験されたのが、高島鞆之助先生であった。

高島鞆之助　明治10年代
（提供・石黒敬章コレクション）

薩摩の郷中教育

一方、青少年時代には、薩摩の郷中教育を受けている。

例えば、小石につまずいて泣くと、薩摩の母親は、「石に負けてどうする」「泣こよかひっ飛べ」と、声をかけていた。

さらに大きくなると、「いろは歌」を学び、藩校「造士館」でも、毎日1回は、「古えの道を聞きても唱えても、わが行いにせずは甲斐なし」と、詠みながら勉学に励んでいた。この教育法では、山坂達者、野太刀自顕流（朝に三千、夕に八千回の横木打ち）、詮議(質問形式で判断力・知力を養った）を含め、郷中(地域)ごとに、年令段階別の集団活動に取り組んでいた。

この薩摩的教育法も、イギリスのベーデン・パウエル将軍によって、ボーイスカウトの参考にされ、一躍、世界的な広がりを見せるに至った。スカウト手帳に、「薩摩の健児の社」とあるのが、これである。

この郷中教育の上に、帝王教育体験を積み重ねられた高島先生が、大阪偕行社附属小学校の設立に至るのである。

大阪偕行社への明治天皇の行幸

明治20年1月8日午後、現・追手門学院大手前中・高等学校校地に、二階建ての豪奢な大阪偕行社が完成し、「開社の典」を開催した。この時、高島鎮台司令官が、「天の時、地の利、人の和…。」という言葉を使って、挨拶している。

その後、相撲、西洋手品、煙火等の余興、午後7時会食、午後9時30分に解散している。

大阪偕行社正門
（『大阪城趾写真帳』大正10年発行　府立中之島図書館所蔵）

実は、この約一ヵ月後、2月15日に、大阪偕行社に明治天皇の行幸があり、梅田停車場→淀屋橋筋→松屋町→大阪鎮台→練兵場→大阪偕行社の経路で、ご到着になり、午後1時より、将校一般へ拝謁を賜った。その日、行在所となる。翌16日、茨木市（手幣山・耳原公園→稲荷山・太田神社）で、大阪鎮台兵による野外演習をご覧になった。この本学院大学に近い場所に、現在、「司令官高島鞆之助」と刻まれた高さ約5メートルもの、それも2基の記念碑が残されている。

また、同年3月～4月には、陸軍大学校の参謀旅行が、神戸議事堂→西宮→伊丹→茨木→大阪の地域にかけて、陸軍大学校教官メッケル少佐を中心に行われ、参謀旅行終了の4月17日夜、高島鎮台司令官主催の夕食会を、大阪偕行社で開催している。

こうして大阪城周辺地域が、明治時代、最も輝いていた年、その翌年に大阪偕行社附属小学校が、誕生した訳である。

茨木市の記念碑（長谷吉治撮影）

大阪偕行社附属小学校の設立

大阪鎮台司令官高島鞆之助は、大阪偕行社幹事長今井兼利少将らと教育問題を相語らい、「学校の設立こそ、唯一の解決の道である」という結論に達した結果、明治21年4月3日、大阪偕行社附属小学校を設立した。

尋常科4年高等科3年まで7学級、木造平屋建て一棟、生徒数91人でスタートした。

この学校は、制服・革靴・ランドセル（背嚢）等を着用し、全国的に見て、オンリーワンの特徴を有していた。明治18年、東京では、学習院がランドセルを用いたが、西日本では、おそらく最初ではあるまいか。先年まで、本学院小学校に、ランドセルの季節になると、新聞社の取材があったのも、こうした事情通の記者がいたからであろう。